第416号

月報 蔦の教会

日本聖公会
川越キリスト教会

〒350-0056　川越市松江町 2-4-13　（牧師）　司祭　パウロ鈴木伸明　☎049-222-1429　FAX049-222-2056
http://www.kawagoe-seikoukai.org/　（編集）文書部　ルカ　野澤　達也

2021 年度宣教テーマ　「わたしの家はすべての民の祈りの家（聖書）―煉瓦の聖堂１００周年―」

レンガの聖堂百年を迎えて
百年前の教会の姿生き生きと
当時の記録をひもといてみると

立教大学資料センターのデータベースの中の「基督教週報……大正10（1921）年4月29日発行」に川越基督教会の新聖堂聖別式当日の様子が掲載されていました。原文は旧字体やかなり難しい表現が使われているため、字体や言葉遣いをわかりやすく書き換えてご紹介します。

……

川越聖公会礼拝堂聖別式

主の深きご恩寵（おんちょう）により、かねて新築中であった我が川越聖公会新礼拝堂は、工事が順調（じゅんちょう）に進（しんぽ）み、このほど全て竣工（しゅんこう）して、春風駘蕩（たいとう）萬草緑に萌え、桜花爛漫（らんまん）の本月（四月）十日、めでたくその聖別式を挙行する光栄に浴することができた。

この日数日にわたり低迷する雲や霞まったく晴れて、春の日がうららかに輝きながら主のご恩寵そのもののように、桜花歓び笑い、松の緑いよいよ色濃く万物欣欣（きんきん）して我らと喜びを共にするに似ている。

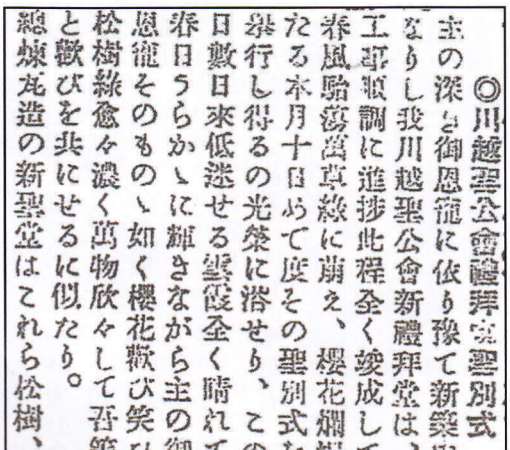
総煉瓦造りの新聖堂はこれら松の樹、桜樹に囲まれ、鐘楼独り高く抜きんでて鐘楼上の十字架は天地の融合全地上の救済なる崇高の標識を内外に宣示するようである。

監督（主教）ジョン・マキム師①長老（司祭）ライフスナイダー師②同落合吉之助師③同山縣雄杜三師④同貫民之助師⑤がご来臨、なお、当教会出身として前橋より執事山本三次郎師⑥神学院より片岡常吉氏⑦が出席せられ、会衆としては所属会員の他、前橋教会婦人伝道師鵜殿氏⑧立教大学峰雄氏⑨など当教会縁故の遠地より来会した方もいた。中学校校長その他町の有識者階級の未信徒も加えて会堂に満ちた。

午前十時片岡神学生奉持の十字架を先導に詩編第二十四編を唱えながら聖職が粛々と聖壇に入り、マキム監督が司式されて聖別の式が営まれ、監督授与の聖別式文を田井長老（司祭）がこれを朗読して朝祷に入った。使徒信経前まで貫長老司式、以降山縣長老司式、落合長老、片岡神学生の聖書日課朗読があった。この間山縣長老により説教として、地上の母たる教会を、新聖堂を与え給える神のご恩寵、進んで我ら信徒の重大なる責務について諄々と御懇篤なるご教示があった。

朝祷が終わってから聖餐式に移り、マキム監督より生命の種なる主の尊き聖餐を受け、監督の祝祷をもっていと荘厳のうちにめでたく聖別の式を終了した。

顧みれば川越町において初めて主のみ教えが宣べ伝えられたのは明治十一年の遠い昔であった。爾来四十有余年の長年月幾多主にある先覚熱心なる伝道、中でも現田井長老のその過半にわたる長年不撓不屈（ふぎょうふくつ）、悪戦苦闘した過ぎ去った日々を思って今日の盛事を見るときは実に感慨無量である。（次ページに続く）


◎川越聖公會禮拜堂聖別式
主の深き御恩寵に依り豫て新築中なりし我川越聖公會新禮拜堂は、工事順調に進捗此程全く竣成して春風駘蕩萬草緑に萌え、櫻花爛漫たる本月十日ゆて度その聖別式を挙行し得るの光榮に浴せり、この日數日來低迷せる雲霞全く晴れて春日うらかゝに輝きながら主の御恩寵そのものゝ如く櫻花歡び笑ひ松樹緑愈々濃く萬物欣々して吾等と歡びを共にせるに似たり。
總煉瓦造の新聖堂はこれら松樹、

右はデータベースより印刷した一部分

終わりに臨み、いと少なき小羊の群れに、この壮大なる聖堂を与え給える主の広大なるご恩寵に対し、誠心誠意感謝と賛美を捧げると共に、国際政局がかんばしくないと伝わる中でも、ニューヨーク大学ベダーソン氏はじめ遠く海を隔てた米国の兄弟姉妹より多大のご後援賜ったことに対して満腔（まんこう）の謝意を表し、今後共神のお恵みの豊かであることを祈るものである。

捧堂式記念伝道会

同日午後七時より新聖堂第一回伝道説教会を開催、山縣長老の「デモクラシー思想と基督教」、山本執事の「時代の要求と基督教」なる説教があった。

十一日午後七時同じく二日目開催。片岡神学生の「はばからずして神の御座に来たれ」、山本執事の「社会改造と基督の愛」なる説教があった。

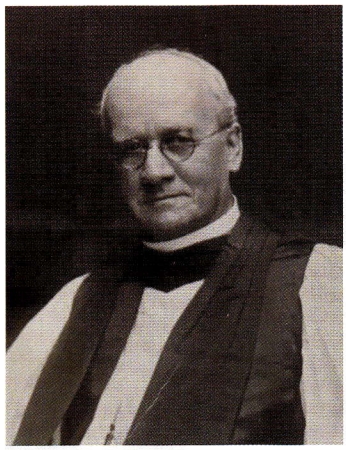
十二日午後七時同三回目開催、教会委員牛窪君の感話、山本執事の「社会改造とキリストの愛」、貫長老の「祈祷を聞き給ふ神」なる説教があった。

前後三日を通し、世間にはいわゆる花見気分にあふれていて、人心はなはだ浮かれているために、吾等の心からの叫びは「大声不入於里耳」（たいせいりじにいたらず）のたとえのようである。予想した多数の聴衆を得られなかったが、ただ大能の主のみ旨のままに真理の宣伝に努めている私たちの試みは、必ずや主の妙なる御摂理によって報われる日の来ることを信じて疑わない。末筆ながら講壇に立てられた諸先生に対し深く感謝の意を表すものである。

（一教会員からの報告）

……

参考　文中の人物についての情報



①監督ジョン・マキム師

北関東教区初代主教　１８８０年来日。１８９９年より40年間にわたり日本聖公会議長をつとめ、この間42年間、立教大学理事長も務めた。１８９６年の東京北部地方部（北関東教区の前身）設立時の主教を担当された。関東大震災の時本国へ送った電文「神にある信仰のほかすべてを失えり」は有名な言葉。

②長老ライフスナイダー師

北関東教区第２代主教　１９０１年来日。１９１２年より20年間立教学院の総理を務める。１９３６年マキム主教の後任として、北東京地方部主教に就任。１９４１年に辞任し帰国された。

③長老落合吉之助師

聖公会神学院の教授と20年間にわたり校長を務めた。東京聖三一教会、浦和諸聖徒教会も司牧された。

④長老山縣雄杜三師

聖公会神学院教授　教会史の権威者。東京聖三一教会、府中聖マルコ教会で司牧。基督教週報の主筆を永年にわたり担当された。

⑤長老貫民之助師

北関東教区内諸教会（東松山、前橋、熊谷、草津、幸手、日光）を司牧された。

⑥執事山本三次郎師

川越教会出身二人目の聖職者。川越本町（現元町）出身。川越聖公会青年会で活躍後、１９１９年司祭按手。秋田、会津若松、前橋、草津で牧会。

⑦神学生片岡常吉氏

川越教会出身三人目の聖職者。川越地区の小学校で教員を務めた後神学生となり、福島、前橋の教会で務めた後、山形聖ペテロ教会を永く司牧された。川越教会墓苑に眠る。

⑧婦人伝道師鵜殿梓氏

埼玉県大里郡出身　１９１８年仙台聖公会より転入。川越教会で働く中「聖堂新築準備委員」を務められた。その後前橋聖マッテア教会に転任された。

⑨立教大学峰雄郁次氏

川越上松江町（現松江町２丁目）出身。１９０３年川越聖公会青年会の創立時に中心メンバーとして活躍された。後に立教大学に奉職。

「基督教週報」について

日本聖公会の機関誌「基督教週報」は１９００年に発刊、１９９５号を１９９４年に発行後に廃刊となった。聖公会の活動を知る貴重な週刊紙であった。川越教会に関する記事も多数掲載されている。この全号は立教大学資料センターのデータベース上

で公開されている。家のパソコンで容易に閲覧が出来る。ご希望の方には資料保管委員会で閲覧操作案内を受付け中。

聖別式の様子を伝える基督教週報を読んで

パウロ　山本　元

古都川越の目抜き通りにそびえ立つ煉瓦の礼拝堂の出現に町の人々の驚きは大変なものであったろう。週報紙面筆者は言う「鐘楼上の十字架は天地の融合全地上の救済なる崇高の標識を内外に宣示するが如し」。完成式典には教会関係者はもちろん、町内の教育者他有識者にも広く呼びかけ会堂は満席になったとの事。この頃より「地域に根差した、開かれた教会」を目指していたことが解る。式典も祝い事に終わる事なく、説教、講演会を中心に伝道会を3日間にわたり実施し、予期した数の聴衆を集められなかったようではあるが、同じく紙面には「大能の主の御旨のまに真理の宣伝に努むる吾等の試みは、必ずや主の妙なる御摂理によりて酬ひらるる日の来るべきを信じて疑わず」（原文引用）筆者や当時の信徒の皆様の熱気が伝わってくる。

※人物についての情報と基督教週報については山本元さんに調査執筆いただきました。

聖堂聖別百周年記念事業の準備を継続

今後のスケジュールの再検討

5回目の聖堂聖別百周年記念事業実行委員会が4月10日に開催され、今後の事業の進め方や進捗状況についての協議を行いました。

記念礼拝を中心としたメインのイベントを予定している来年の4月9日（土）は復活前主日の前日になります。復活日を間近に控えていることから高橋宏幸管理主教の招請については難しいのではないかと思われましたが、ご出席いただける見通しになりました。ただ現在のコロナによる影響がどのようになるか、不明の点が多々ありますので、具体的な準備作業はもう少し様子を見る必要があります。

前号で報告の通り、聖別証の再発行と披露は終わり、ベストリー内の北側壁面に取り付けることになりました。百年前では当時の牧師田井正一司祭がマキム主教から聖別証を預かって朗読した記録のように、広田勝一主教から聖別証を預かり、鈴木伸明司祭が朗読しました。（1面記事参照）

記念誌は増ページ

記念礼拝が1年延期になったことで、配布する記念誌については予定よりページ数を増やす方向です。（当初予定では4ページ）礼拝堂を中心に建造に至るまでの物語、これまで維持してきた修繕の歴史や経過、建物に付随する設備、備品などについても盛り込む企画です。来年4月に間に合わせるためには今後の編集作業も能率よく進める必要があります。

看板には使われているレンガをアピール

礼拝堂の外に設置する看板についても具体的に準備が進んでいます。約一年間掲げる予定ですので、前回宣教１４０周年の時よりも丈夫な素材を使って製作する予定です。すでに決まっている宣教テーマに加えて、聖堂のレンガは渋沢栄一氏が設立した深谷の日本煉瓦製造株式会社の製品であることを表示することになりました。今年はいろいろなところで渋沢栄一の話題ですが、この聖堂も栄一にゆかりのある建物です。最近見つかったレンガの一部にその会社の刻印が見つかりました。おそらく熊谷の教会も立教大学も、あの時代に作られた多くの建物に深谷産のレンガが使われていると思われます。

興味深い定礎の開封

礼拝堂定礎の開封についても検討されました。開封や再度の封入作業はそれほど難しい作業ではなさそうで、石材店ならどこでも可能のようです。封入されている内容が不明ですが、中身を吟味し、一定期間公開します。同時に次の百年（？）に向けて今度はどのような物を封入するか、またこれまで封入されていた物をどのように扱うか。いろいろと興味がわきます。とにかく開けてみることが出発点になるでしょう。

資料展示では写真パネルは礼拝堂展示ですが、期間や内容については検討中です。新たに発見された資料などもあり、どのような展示になるか楽しみです。

今年のバザーについては、バザー委員会の検討の結果、春のバザーは中止、秋のバザーについては9月時点での状況を踏まえて実施の可否を判断することにしています。実施するなら10月24日を予定しています。

（実行委員　ルカ　野澤達也）